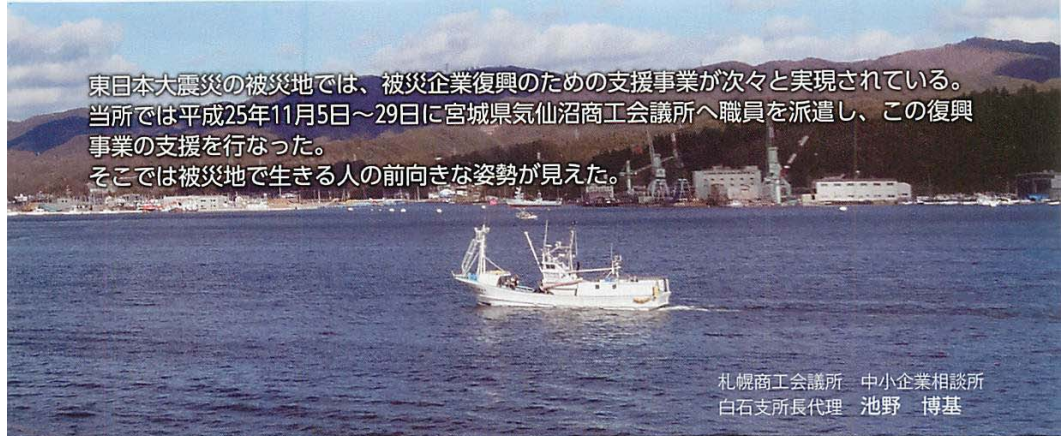


# 「気仙沼は元気！東北は元気！」と伝えてほしい



東日本大震災の被災地では、被災企業復興のための支援事業が次々と実現されている。当所では平成25年11月5日～29日に宮城県気仙沼商工会議所へ職員を派遣し、この復興事業の支援を行なった。そこでは被災地で生きる人の前向きな姿勢が見えた。



札幌商工会議所 中小企業相談所  
白石支所長代理 池野 博基

同社が運営するギャラリー「緑」では女性が中心となり、船の帆に使う帆布で帆前掛け（ほまえかけ）や、靴を製作し販売している。



女性が活躍するギャラリー「緑」のスタッフの方（左）と顧客

## 新しい会社・店も生まれている

震災後、気仙沼市内に女性の雇用創出を目的として設立された会社、ガンパレ（株）を訪問。



試食用商品について気仙沼はっぴを着て説明する筆者（左奥）

各被災企業とも「直販」の強化に注力しており、商品開発に余念が無く、震災で失った販売ルートでの再構築など、販路拡大を切望していることを肌で感じた。

が多かった「など」参加されたの企業も売上だけでなく、それ以上の成果を得ることができた

## 海と生きるまち気仙沼

宮城県北部沿岸に位置する気仙沼市は、現在人口約七万人。水産加工業が主な産業で、海からの恵みを楽しみながら海と生きてきた。東日本大震災では、震度五強、六弱を記録、死者千二百八十三名、津波の浸水深は三・六七m（二十・九九mにおよび、市内四十%超の二万五千九百六十六棟が被害を受けた。経済損失は、年間売上ペースの二千三百億円にも上る。

気仙沼商工会議所は市中心部に位置し、会員数は震災前約千六百社から大きく減少し現在千三百五十社となっている。

## 地域復興マッチング事業

### 「結の場」

被災企業が抱えている課題を解決するため、大手企業などの経営資源を被災地域の企業と効果的につなぐのが「地域復興マッチング『結の場』」だ。

復興庁宮城復興局が、地元商工会議所・商工会と連携し、大手企業などが有する豊富な経営資源（ヒト・モノ・情報・ノウハウなど）の「支援シーズ」を活用できるように、両者が対話する場を設けている。いわゆる「商談会」ではなく、支援企業を持つ資源の中で被災企業に対して支援策を提案し、

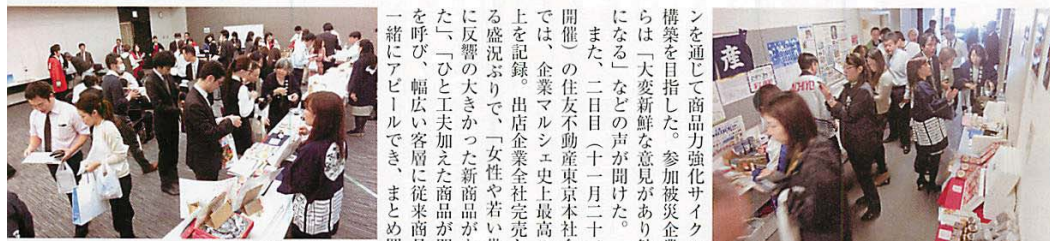
マッチした場合は、支援企業が手弁当で支援するもの。支援の一例として、支援企業の店頭での共同販売、海外企業とのパイプを活用した風評被害払拭PR、新商品開発や地域ブランド育成支援事業などがある。

### 「結の場」

## 企業マルシェ気仙沼

復興庁宮城復興局と気仙沼商工会議所がタッグを組みマッチングを実施し、大手企業・団体三十三社が、気仙沼の水産加工業者十社に対して支援事業を提案。その中のプロジェクトとして実現した「結の場」企業マルシェ気仙沼は、支援企業の社内に被災企業の産直市場を特設し、従業員へ向けて試食会・特産品販売を行うもので、今回は東京での開催。私はこの準備から物販などの支援業務に携わることとなった。

今回は市内被災企業三社、（株）阿部長商店、（株）八葉水産、（株）石渡商店が、直接自慢の商品を販売した。一日目（十一月二十一日開催）は、東京都浅草にあるアサヒグループホールディングス本社ビルにて開催。これまでも本社ビルで開催しており、復興庁では試食や購入した商品についてのアンケート調査も実施。一過性の物販だけでは終わらないよう、消費者とのダイレクトコミュニケーション



住友不動産東京本社での企業マルシェ

また、俳優の渡辺謙さんが復興支援のために地元企業の方々と共同でオープンさせたカフェ「K1-Port」を視察。イベントやギャラリースペースとして人と人をつなぐことをコンセプトとしており、賑わいが生まれる場所を目指してオープンした。



昨年11月25日にオープンしたばかりのカフェ「K1-Port」

## 出逢った多くの人が

### 明るく前を向いていた

震災から二年十カ月が経とうとしている。しかしながら、震災で全壊となった商店などは、仮設の商店街などで経営を続けてはいるものの、元の場所に戻る目的が立っていない。土地の高上げ・防潮堤の設置などまら全体の区画整理の問題や、移転の際の融資がスムーズに進まないなど、遅々として復興が進んでいない面もある。



復元商店街 飲食店など50店舗が軒を連ねる

ただ、現地で出逢った多くの人達が、自分の想像していた気持ちとは裏腹とにかく前向きだった。「多くのものを失った。でも、自分は今も生きてるんだから。」「店が流された。ただ、暖簾と包丁が残った。だから店を続けるってことじゃないか。」「このまちは世界一の漁港だから、そして今日もまた多くの魚が揚がっているのだから。」「気仙沼で人気の居酒屋さんは平日でも満席で賑わっていた。」「このまちは元気。東北は元気だから札幌の人にもそう伝えてほしい」と言っていた。

「そもそも震災前からこのまちは、日本全国の地方都市に存在した。さまざまな問題が顕現したわけではない。だからこそ前向きにならなければ。」「気仙沼はこれからも海と生きていく。日本を牽引するくらいに元気で頑張る。元に戻るというのではなくて、この震災をきっかけとして、地方都市のモデルとなり、世界一の港町を目指して、これから気仙沼市全体で、総力戦で臨みたい。」との話を聞いて、逆にこちらが奮い起こされる経験となった。

今後ともさまざまな事業を通してお互いの未来のために関わることができればありがたいと、切に感じた。